

1. ついで主はモーセとアロンに告げて仰せられた。
2. 「イスラエル人に告げて言え。
だれでも、隠しどころに漏出がある場合、その漏出物は汚れている。
3. その漏出物による汚れは次のとおりである。
すなわち、隠しどころが漏出物を漏らしても、あるいは隠しどころが漏出物を留めていても、その者には汚れがある。
4. 漏出を病む人の寝る床は、すべて汚れる。
またその者がすわる物もみな汚れる。
5. また、だれでもその床に触れる者は自分の衣服を洗い、水を浴びなければならない。
その者は夕方まで汚れる。
6. また漏出を病む人がすわった物の上にすわる者は、自分の衣服を洗い、水を浴びる。
その者は夕方まで汚れる。
7. また、漏出を病む人の隠しどころにさわる者も、自分の衣服を洗い、水を浴びなければならない。
その者は夕方まで汚れる。
8. また、漏出を病む者が、きよい人につばきをかけるなら、その人は自分の衣服を洗い、水を浴びる。
その人は夕方まで汚れる。
9. また、漏出を病む者が乗った鞍はみな汚れる。
10. また、どんな物であれ、その者の下にあった物にさわる者はみな、夕方まで汚れる。
また、それらの物を運ぶ者も、自分の衣服を洗わなければならない。
水を浴びなければならない。
その者は夕方まで汚れる。
11. また、漏出を病む者が、
水でその手を洗わずに、だれかにさわると、さわられた人は自分の衣服を洗い、水を浴びる。
その人は夕方まで汚れる。
12. また、漏出を病む者がさわった土の器はこわされなければならない。
木の器はみな、水で洗われなければならない。
13. 漏出を病む者がその漏出からきよくなる時は、
自分のきよめのために七日を数え、自分の衣服を洗い、自分のからだに湧き水を浴びる。
彼はきよい。
14. 八日目には、自分のために、山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取らなければならない。
彼は主の前、会見の天幕の入口の所に来て、それを祭司に渡す。
15. 祭司はそれを、一羽を罪のためのいけにえとして、
他の一羽を全焼のいけにえとしてささげ、祭司はその漏出物のために、主の前でその者のために贖いをする。
16. 人が精を漏らしたときは、その人は全身に水を浴びる。
その人は夕方まで汚れる。
17. 精のついている衣服と皮はすべて、水で洗う。
それは夕方まで汚れる。
18. 男が女と寝て交わるなら、ふたりは共に水を浴びる。
彼らは夕方まで汚れる。
19. 女に漏出があって、その漏出物がからだからの血であるならば、彼女は七日間、月のさわりの状態になる。

- だれでも彼女に触れる者は、夕方まで汚れる。
20. また、その女の月のさわりのときに使った寝床はすべて汚れる。
また、その女のすわった物もみな汚れる。
21. また、その女の床に触れる者はだれでも、その衣服を洗い、水を浴びなければならない。
その者は夕方まで汚れる。
22. また、何であれ、その女のすわった物に触れる者はみな、その衣服を洗い、水を浴びなければならない。
その者は夕方まで汚れる。
23. その女の床であっても、すわった物であっても、それにさわった者は夕方まで汚れる。
24. また、もし男がその女と寝るなら、その女のさわりが彼に移り、その者は七日間汚れる。
彼が寝る床もすべて汚れる。
25. もし女に、月のさわりの間ではないのに、
長い日数にわたって血の漏出がある場合、
あるいは月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合、
その汚れた漏出のある間中、彼女は、月のさわりの間と同じく汚れる。
26. 彼女がその漏出の間中に寝る床はすべて、月のさわりのときの床のようになる。
その女のすわるすべての物は、その月のさわりの間の汚れのように汚れる。
27. これらの物にさわる者はだれでも汚れる。
その者は衣服を洗い、水を浴びる。
その者は夕方まで汚れる。
28. もし女がその漏出からきよくなったときには、七日を数える。
その後その女はきよくなる。
29. 八日目には、その女は山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取り、
それを会見の天幕の入口の祭司のところに持って来なければならない。
30. 祭司は一羽を罪のためのいけにえとし、他の一羽を全焼のいけにえとしてささげる。
祭司は、その汚れた漏出のために、主の前でその女のために贖いをする。
31. あなたがたは、イスラエル人をその汚れから離れさせなさい。
彼らの間にあるわたしの幕屋を汚し、その汚れたままで彼らが死ぬことのないためである。」
32. 以上が、漏出のある者、
また精を漏らして汚れた者、
33. また月のさわりで不浄の女、
また男か女で漏出のある者、
あるいは汚れている女と寝る男についてのおしえである。

説教

神さまにいのちがあります。

神さまは、天地万物をお造りになり、宇宙を支配しておられます。

そして、生きとし生けるすべてのものにいのちをお与えになりました。

神さまは万物にいのちを与えるいのちの源なお方です。

それで、神さまと共にあるところにいのちがあります。

神さまから離れて、いのちはありません。

神さまから離れるならば、そこには死しかありません。

それで、神さまに背いたアダムとエヴァは、エデンの園を追放されて死ぬようになりました。

そして、大祭司アロンの息子ナダブとアピフも、神さまに背いたため、打たれて死にました（レビ記 10:1-2）。

それでは、神さまが共におられるとはどういうことでしょうか。

神さまは昔イスラエルとどのように共におられたのでしょうか。

それは幕屋によってです。

幕屋というのは、神さまがイスラエルにご自身をあらわされたシナイ山の携帯版でした。

持ち運びの便利な、言わば携帯用のシナイ山でありました。

しかし、幕屋によって神さまがご自身をあらわすといっても、

ただ何のお膳立もなくそのまま神さまが人々と親しく語り合ったわけではありません。

神さまに背いて罪の中に生きている人間が神さまと会うためには、準備が必要でした。

つまり、人は、その犯した罪を身代わりのいけにえによって贖ってもらう必要がありました。

そして、神さまに献身を誓い、一つ一つの神さまの支持に従う必要がありました。

人が罪を犯すと、

その人が罪に汚れるのみならず、祭司も幕屋も罪に汚れてしまいます。

そうすると、神さまはそこにもう臨在をあらわさなくなります。

人に語りかけてくださいません。

いくら祈っても、神さまは聞いてくださいません。

これが「罪」あるいは「汚れ」というものです。

「罪」や「汚れ」は、私たちを神さまから遠ざけるものです。

私たちと神さまの間を断絶するものです。

私たちを神さまから遠く引き離すものです。

そして、そのままでは死に至ります。

しかし、その罪を悔い改めて、キリストの血により汚れをきよめる時、私たちは再び聖さを取り戻します。

そうになると、神さまは再び私たちと共にいてくださるようになります。

私たちがいのちを回復するのです。

レビ記 15 章は人の生殖器官に関わる汚れときよめの規定です。

2-15 節は「隠しどころに漏出のある者」、

16-18 節は「精を漏らして汚れた者」、

19-24 節は「月のさわりで不浄の女」、

25-30 節は「月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合」についてそれぞれ教えます。

「隠しどころに漏出のある者」(2-15)とは、性病を病む者のように思われます。

その場合には、

彼の寝る床も、座る物も、乗る鞍も、吐くつばも、彼の触れるとにかく一切合切が「汚れる」というのでした。

漏出を病む者が癒された場合には、

癒されて七日を待ってから、その人は自分の衣服を洗い、からだに湧き水を浴び、

八日目には、鳩二羽を取り、

一羽を罪のためのいけにえとして、

もう一羽を全焼のいけにえとしてささげて、「その漏出物のために」彼の罪を贖います。

「月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合」(25-30)は、出血を伴う婦人病、あるいは性感染症のことです。

この場合にも、同様に彼女の触れる物すべてが汚れると言われ、

癒された際には、衣服を洗い、水を浴び、

八日目には鳩二羽を取り、

一羽を罪のためのいけにえとして、

もう一羽を全焼のいけにえとしてささげて、「その汚れた漏出のために」彼女の罪を贖います。

「精を漏らして汚れた者」(16-18)は、「男が女と寝て交わる」性交などで射精した者のことです。

その際には、「夕方まで汚れる」ため、その人は全身に水を浴びます。

性交した男女とも水を浴び、精液のついてる衣服も水で洗います。

この場合には、病気ではないので漏出を病む者のようにいけにえをささげる必要はなく、ただ水の洗いだけで充分でした。

「月のさわりで不浄の女」(19-24)は生理中の女性のことです。

生理も病気ではないので、いけにえは必要なく、水で洗うことだけが指示されます。

以上に共通するのは、これらが人の生殖器官に関わる汚れときよめの規定だということです。

つまり、性感染症にしても、生理にしても、婦人病にしても、精を漏らすことにしても、

これらはすべて人の生殖に関わることで、このことをレビ記 15 章は規定しているのです。

神さまは、人を男と女に造り、「産めよ、増えよ、地を満たせ」と性の営みを祝福なさいました(創世記 1:28)。

しかし、神さまに背いて生きるようになったため、地は呪われてしまいます(創世記 3:17)。

人の性の営みも墮落してしまい、神さまのみこころを行わなくなってしまいました。

それで、神さまは、

人がもう二度と高ぶって神さまに背くことなく、

むしろへりくだって神さまに従うようにと、女に「みごもりの苦しみ」をお与えになりました(創世記 3:16)。

本来は神の栄光をあらわすいのちを生み出すことに直接関わる生理や射精や性交は、この人間の墮落の故に、死に至る呪われた罪人をこの世に産み出すための呪われた営みとなってしまいました。そして、それを象徴するような様々な性感染症や病気がつきまといます。

本来、結婚とは汚れたものではありません。

聖いものです。

神さまがお定めになった聖いものです。

聖なるものです。

いのちに満ちたものです。

生理の際の「血」はいのちそのものである、「血はいのちだ」と、申命記 12:23 は教えます。

男が出す精子も、それがそのまま子供となっていく、所謂「子種（子供の種）」であるわけです。

だから、これはこの上なく尊いものであるはずなのです。

聖いものです。

それなのに、人間の墮落によって、この尊い自覚が失われてしまいました。

神と人を愛して神の栄光をあらわすべき生殖器官が、単なる人間の欲望を満たすための道具と化してしまったのです。

ある者にとっては、金儲けの道具ともなります。

不倫や売春が世界に溢れます。

そのため、性感染症も世界に蔓延していくのです。

そして、このような墮落した価値観の故に、結局、生まれる子どもいのちも軽んじられるようになります。

我が子を食いものにしたり、子供の人生をダメにします。

「お前なんか死ね！」とか「バカ」とか罵って、子供に死に至らせるのです。

人の命を軽んじる子供や若者が増えたと、最近しきりにマスコミで騒いでいますが、あんなのは偽善です。

そういう子供に育てたのは、今しきりに騒いでいる親や年寄りたちです。

どういう形にせよ、

親からそういう価値観しか教えられず、

そういう愛情しか受けられなかったのですから、当然そういう子供にしか育ちようがありません。

小さい時から、出世して金儲けするために、

塾通いばかりで、学校や塾に預けっぱなしで、

塾では人に勝つことや人を見下すことしか教えられず、

家でゆっくり家族と一緒に食事をしたり、会話したり、遊んだりする暇がないとしたら、それは可愛そうです。

塾は学力や能力を伸ばすところです。

でも、子供を愛してはくれません。

子供を大切にしてはくれません。

子供の人生に責任取ってもくれないのです。

塾にあずけるのは悪いとは思いますが、

結局、子供を愛し、子供に最も大切な価値観を教育するのは親だということを自覚しなければなりません。

私たちの主イエスキリストは、この世界を称して「悪い、姦淫の時代」とか「姦淫と罪の時代」と呼びました。

他にもいろいろと言い方があってあるだろうと思うのですが、イエスさまは「姦淫の世」とバッサリ切って捨てたのです。

それが人間の罪とか墮落というものを最も象徴していると思われたからでしょう。

生殖器官は、新しいいのちを生み出すために神さまが私たちに与えてくださったものですが、その役割を果たしていない、

その意味で、この世界は「罪」とその結果である「死」に満ちている、とイエスさまは鋭く的確に断罪されたのです。

だからこそ、私たちは、生殖器官を神さまに聖別する必要があります。
罪に汚れた生殖器官を聖める必要があります。
それで、レビ記 15 章が教えられているのです。
異邦社会の異教徒たちのように、
無条件で、何の制限も支配も受けずに、
ただ適当に、やりたい人と、やりたい時に、
やりたい放題に性交して、あちこちに性病をまき散らすのではなく、
性感染症の患者を人々から区別し、
生理のたびに、
精を漏らすたびに、
性交するたびに、
自らが死に向かっている罪人であることを自覚する必要があったのです。
これでいいのだろうか、良かったのだろうか、後ろめたく反省する必要がありました。
それで、「汚れた」のです。
「精を漏らした」場合には、夕方まで汚れました。
生理の時は、ずうっと七日間、「汚れた」ままでした。
そうして、水を浴びました。
「汚れた」状態にある場合、幕屋での礼拝に参加することはできませんでした。
つまり、神さまを正式に礼拝することから遠ざかっていなければならなかったのです。
神さまとの交わりができませんでした。
神さまから言わば見捨てられたような状態になっていました。
そうしながら、自らの性のあり方、性生活のあり方について、深く反省を迫られたのです。

こうして、人の性の営みの一つ一つに神さまの粘り強い介入がなされました。
このレビ記 15 章に於いて、
人は最も個人的な隠れた生活と言える自分の性生活について、神さまの深い干渉を受けるようになりました。
一つ一つのケースについて、みことばに従わなければなりません。
これはどうなるのですか、この場合にはどうなるのですかと、人はいちいち神さまに尋ねなければなりません。
そして、そのみことばに従わなければなりません。
みことばを聞いて、悔い改め、反省し、水を浴び、いけにえを捧げて、
ある時は神さまに見捨てられたような状態になりながら、ある時は性交を自制しながら、
その都度その都度、一つ一つみことばに従って、性生活に於いても神と共に歩まねばなりません。

31. あなたがたは、イスラエル人をその汚れから離れさせなさい。

彼らの間にあるわたしの幕屋を汚し、その汚れたままで彼らが死ぬことのないためである。」

この直訳は「汚れの中で死ぬな」で、「自分が汚れの中にあるにもかかわらず、それと知らずに死ぬ」ことを意味します。
異教徒は、それとは知らずに生きていて、知らないまま死んでしまいます。
でも、イスラエルの人々はそうであってはならない、
自分が汚れの中にあることを知れ、そして「離れよ」と言うのです。
何が汚れで、何が聖いことか、それを知れ、学べ、自覚せよ、
「汚れている」と言われながら、水を浴びながら、いけにえを捧げながら、
幕屋の礼拝から引き離されたり、近づけられたりしながら、私たちは神と共に歩むのです。

ここに集われたみなさんひとりひとりが、
 みことばの通りに神さまのみこころを行って、
 性生活に於いて神と人とを愛して神の栄光をあらわして生きていかれるよう祈ります。
 そうして、この世界に新しいいのちを力強く生み出していかれるよう、主の御名により祈ります。

31. あなたがたは、イスラエル人をその汚れから離れさせなさい。
 彼らの間にあるわたしの幕屋を汚し、その汚れたままで彼らが死ぬことのないためである。」

וְהִזְרַתֶּם אֶת־בְּנֵי־יִשְׂרָאֵל מִטְּמֵאוֹתָם

- | | | | |
|----------|--|--------|----------------------------------|
| טְמֵאוֹה | uncleanness | נִזַּר | Hi.Pf. |
| 1. | sexual. | | <i>sacredly , separate from.</i> |
| 2. | of a foul or filthy mass (in a caldron), (in the temple). | | |
| 3. | , ethical and religious ; רִיחַ הַטְּמֵא <i>unclean spirit</i> , which inspired the prophets to lie. | | |
| 4. | ritual, of men; of women; , a time favourable to conception; of meats. | | |
| 5. | local, of the nations. (pg 380) | | |

וְלֹא יָמָתוּ בְּטִמְאוֹתָם בְּטִמְאוֹתָם אֶת־מִשְׁכְּנֵי אֲשֶׁר בְּתוֹכָם:

- | | | | | |
|--------|----------------|----------------------|-------------|-----------|
| middle | dwelling-place | Piel.Inf. | uncleanness | Qal.Impf. |
| | tabernacle | be or become unclean | | die |